

## The way is open where there is a will

～意志あるところに道は開ける～

キャリア教育部通信 第7号

令和4年9月1日

中学生の皆さんへ

キャリア教育部

夏休みが終わり、学校が始まりました。まずは精神的に元気ですか？何でもいいですから前向きになれるものをもって、いいイメージを思い浮かべて、スタートを切りましょう。

2学期は学校行事、進路決定など、「充実」がキーワードになる学期です。未来を見据えて、夢の実現のために、心をワクワクさせながら頑張っていきましょう！

みなさんは、「〇〇の秋」といえば、何を思い浮かべますか？食欲、読書、芸術、実り、スポーツ、行楽など、人それぞれだと思います。今回は、**読書**について考えてみたいと思います。少し難しいですが、6～7割程度理解できれば十分です。

自分の頭で考える読書 荒木博行著 日本実業出版社 の中から、いくつか紹介します。

### 「はじめに」より

私たちは、無意識でいると、本の内容を無批判で受け入れてしまう。その状態のことを、「他人の頭で考える」状態だとすれば、この本の内容そのものも批判の対象でなくてはなりません。「荒木はそう言っているかもしれないけど、私はこう思う」という持論を導き出していただければ、それに優るものはありません。ですから、内容に関する異論や新たな提案も、大いに歓迎です。本文にも書きましたが、「**懐疑**」の存在は読書に欠かすことができません。著者の話を無条件で呑み込むのではなく、何らかの新たな「**問い**」を持つことで私たちの頭を駆動させるのです。

### 「AIに真似できない“抽象化する力”」より

人工知能分野の最新状況を検証した「教養としてのAI講義」の中で、コンピュータ科学研究者のメラニー・ミッチェルは、AIが決して持ちえない人間の優位性とは抽象化とアナロジー（類推化）であると述べています。

『深層学習が驚くべき一連の成果を示すようになると、汎用的な人間レベルのAIの実現に近づいてきたという楽観的な声が、AI界の内外から多数あがった。だが、（中略）最も優れた成果をあげたシステムでさえ、自身の狭い専門領域を越えずと広い範囲に普及したり、抽象化を行ったり、因果関係について学習したりすることはできないのだ。』

多くの人がAIなどの新しいテクノロジーに仕事を奪われると指摘していますが、必ずしもそうなるとは限りません。

AIによる影響力というよりも、その時代に意味を持たなくなった具体的な仕事がなくなり、その時代に意味を持つ新しい具体的な仕事が生まれているだけであり、人間の解釈力をもってすれば、「抽象的な部分は何ひとつ変わっていない」とも言えるからです。

そのような意味では、私たちは「思考する」という人間の機能を失わない限り、AIと共存しながらより有意義な仕事をする事ができるのです。**常に今、目の前にある具体的なものを抽象化し続けること。**今こそ思考の次元を上げることが求められているのです。

### 「抽象化は“それらしい思いつき”ではない」より

しかし、「抽象化」というのは決して簡単なことではありません。「抽象化された知恵」というのは、本当に新たな環境でも耐えうる知恵なのかを確認しなければなりません。具体的にどれくらいの経験数と経験の幅を持って、この抽象化を行ったのか、ということはとても重要です。こういった思考プロセスを経なければ、それは「抽象化」という名前を借りた単なる「それらしい思いつき」にすぎないのです。

### 「“本”という存在がある時代に生きるありがたさ」より

だからこそ、私たちは果敢にも抽象化にチャレンジしつつ、「常にそのフィルターは具体的な現実に即しているのか?」「その適用範囲はどこまでなのか?」と問う姿勢を持ち続けなくてはならないのです。しかし、こう言いたくなるでしょう。「経験の数」や「経験の幅」なんて、一人の人間には限界がある。それではいつまで経っても、意味のある抽象化なんてできないのではないか、と。

それはまさにその通り。一人の人間の経験なんてちっぽけなものです。それだけで抽象化しようとするればロクなことになりません。だからこそ、「読書」に意味があるのです。

本の中には、自分では経験しえない他者の知見が詰まっています。

今を生きる私たちは、自分の経験を踏まえつつ、「本」を通じて過去の先人たちの経験も借りることが自由にできます。

この変化の時代を乗り切るために、抽象化は求められ、そしていつでもやろうと思えばできるのです。この状態を踏まえて、あなたはどんなアクションをとるか、それが求められています。

アンダーラインの部分について、いろいろと解釈できるので、将来へ向けて友だちと話し合ってみてください。先生と話しても面白いでしょう。

「懷疑」と「問い」に関しては、授業においても同じではないでしょうか。先生が分かりやすく教えれば教えるほど、みなさんは先生の話の深く考えることなく無批判で受け止めていませんか。「なぜ?」「本当?」という問いを抱きながら、自分の言葉で説明できる答えを求めていきましょう。これも深い思考の一つです。

新書を読んで、「問い」を持ち、それに対する答えを見つけていきましょう。